
アビリティー・オブ・ウォーズ

扉。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アビリティー・オブ・ウォーズ

【Nコード】

N4599Z

【作者名】

扉。

【あらすじ】

ある少年は1人の逃亡者と出会う。ある青年は裏稼業で街の平和を守っている。ある1位は絶対に負けない強さを持ち、裏の仕事をこなす。世界にはこんなにも様々な人間がいる事を誰も知らない。そして、それらは少しずつ混ざり合っていく……………。

学園編 情報屋編 組織編と色々な主人公を描いていきます。

プロローグ(前書き)

新連載です。

よんで気に入っていただけると幸いです。

プロローグ

スクールシティ
学園街

この街がそう呼ばれ始めたのは今から数十年前。
とある場所に建設された東京都1つ分の大きさを持つ大きな街。
科学が特化した場所に現代ではありえない者達が数多く存在する。
代表的なのが

『サイエンス
人口能力者』

『オカルト
魔術』

『アブソリュート
絶対的才能』

少数ながら世界に広まっているのが『神に近し者』
神を溺愛し、尊敬し、敬い続ける集団。

そして、もつとも現在 貴重な存在が『天変能力者』
イザード

科学では立証されない『魔術』の次に不明な分野とされている。

『天変能力者』は世界書庫にも数えるほどしか登録されていない。
ワールドバンク
それだけ希少で貴重だということだ。

それだけ希少な人を何故、学園街が集めているのかは不明だ。

その概要は極々1部の人間しか知らない。

そう、今から語るのとはそんな何も知らない 　しかし『天変能力者』
である

1人の少年の物語である。

第1話 とある少年（前書き）

第1章 学園編です。

気に入ってくれれば幸いです。

第1話 とある少年

1

少年 灯裂ひびき 蒼そうは困り果てていた。
理由は明白。

この部屋の汚さから考えられる。

「やば……妹にまかせっきりで俺なんも出来ねえ男になっちゃっ」
そう呟いたのが蒼。
珍しい青髪に量の多い毛。
平均体重よりも少しやせて見える体型に左手首にはジャラジャラと
2つのブレスレットをはめている。

蒼の周りには雑に捨ててあるゴミを見てそう呟いた。
彼は家事は出来るが掃除は出来ないという極めて特殊なタイプの人
間だ。

いつもなら全部、妹が片付けていつの다가生憎、妹は友達と旅行へ
行っていて現在はずいぶん不在。

『さあ、片付けますか……』と『蒼は景気よく言いながらゴミを拾
うと』

パリンと何かが割れる音が部屋中に響き渡った。

蒼はすぐに現況を確認しに行くと

「最悪だ……妹の1番のお気に入りのコップを割るとわ……俺、死
亡フラグだったな」

妹の宝物にしていたコップが見事に破損していた。

「落ち着け……落ち着け……って、落ち着つてられるかああ!!
命がかかっている。マジで」

蒼は慌てながらも部屋中のゴミを片づけながら、考える。
そしてある1つの名案にたどり着いた。

「たしか、駅前の雑貨屋さんにあるって言ってたよな……」

それは妹が言っていた言葉。
忘れかけていた言葉だった。

「よし、大体掃除も終わったし今から買いに行きますか」と

蒼はそう言うと、玄関前にある洋服立てから自分のパーカーを持ち
出して玄関を飛び出した。

部屋の中は掃除をする前の方がキレイだったと思われるくらい荒れ
ていた。

2

無事にコップを買い、帰り道の途中で蒼は1人の人物に声を掛けら
れる。

「おっ！！ 久しぶりだな蒼」

「…………… ああ。悠史か。一瞬、変なおっさんが声を掛けたのかと思っただわ」

「どんな反応取ればいんですか俺は？」

久瀬 悠史

『学園街』に存在する『人口能力者』の持ち主。

『学園街』へ来た学生はまず『検査』を受け、科学で能力を得られるか試す。

その中でLv1からLv5まで存在し、Lv5はこの学園街に8人しかいない。

悠史はLv5の第4位であった。

「あれ以来だから…………… 2週間振りか」

「お前、ちつとも外でねえからな。確実に会わねえんだよ」

「ま、外にでてても面白いことねえからな」

蒼は苦笑を浮かべる。

悠史はそれに続いて話を進めた。

「それより、学校の『課題』終わらせたか？」

「いや無理、無理。俺は『検査』に反応しないからどうしようもないんだよ」

「そう言えばそうだったな」

「お前も、お前で苦労してるんだろ。『学園街』 第4位さん」

「お前もな」

悠史は『やべっ！！ 寮の門限がああ！！』と蒼に挨拶を言つと去

って行った。

蒼は悠史が見えなくなるまで手を振ると、悠史とは逆方面に向かって歩いて行った。

今日の晩御飯はコンビニで決まりっ！！

そう、呟くと蒼は近くにあったコンビニへと足を踏み入れた。

3

帰り道、片手にコップの入った袋。もう片方の手にはレジ袋が握られていた。

蒼はガジガジとガリガリ君を貪りながら家へと向かう。

現在の日にちは3月26日 午後11時37分。

もう少しで日付が変わる。

春休みも終盤に突入し、新学期の準備もあわただしく始まる。

そんな時期にのうのうとガリガリ君を食べている蒼の足は静かに止まった。

「あれ……………は」

蒼が見た物は路上にうつ伏せで倒れている少女であった。

『うん』と薄れゆく声を出しながら今にも死にそうな感じであった。

蒼はゆっくりと近づいて少女の安否を確認する。

少女は死にそうな表情をしながら、ゆっくりと口を開いた。

「お…………お腹減った」

蒼は隣にあったコンクリートの壁を壊しそうな勢いでぶつかって行った。

その音は鈍器で殴られたようだった。

「いたた……………」

すると、少女からぎゅるるるるると聞いたことないほどの大きな腹の虫が鳴った。

蒼はゆっくりレジ袋を低く下げると『食べる?』と少女に聞いた。

刹那。

気づいた時にはレジ袋の中身と、いうよりレジ袋自体見当たらなかった。

少女はお腹を摩って表情が柔らかくなる。

蒼は安心して立ち上がった。

「君、迷子?」

「ううん。私は逃げ出してきたの」

(逃げ出してきた…………どこかの施設からか?)

蒼がどう聞きかえそうか迷った瞬間。

轟音。

飛行機が離陸する時に鳴り響くジェット機の音のようなものが近辺に響き渡る。

蒼と少女はとっさに耳を塞いだ。

しばらくすると音は止み、2人はゆっくりと手を外す。

少女の手は小刻みに 肩は大きく震えていた。

「速いよ……………」

そう凍えた、真冬の雪山のような震えで呟いた。

蒼はその言葉を聞き、少女に返す。

「速いって、今の爆音は君が関係してるのか？」

「……………今の音は私を連れて帰る為の警告音のようなもの」

「……………警告音」

蒼はそつと呟くと、辺りを見渡す。

この少女にそんな巨大な組織がかかわっているとも思えない。きっと、ごく少数な人数の反乱と考えている。

しかし、現実とは違かった。

しばらくの静かさの後、再び轟音が鳴り響く。

再び止むと少女の後ろから、コツ……………コツ……………コツと足音が静かに響く。

少女は後ろを向くと全身が震えあがり腰が抜けた様子で地面に倒れこむ。

蒼はゆっくりとコップを地面へ置くと、構えを取った。

そして薄暗い道路の向こう側からやって来たのは

「おやおや、ブレイン。一般人と馴れ合う時間など私達には微塵もないですよ」

「私はもう……あそこには戻らない」

金髪のオールバックで漆黒のスーツを着込んだ青年だった。

第2話 天変能力者

『イザード天変能力者』

名の通り、天変地異を揺らがすほどの力を秘めた者達の総称。科学に特化した『スクールシティー学園街』で解明できない力の1つでもある。それぞれに特化した力を持つ。

たとえば、炎。

たとえば、水。

たとえば、雷。

たとえば、氷。

数々の力がある中で選ばれたこの能力者達は自然と力の使い方を把握しており

戦闘力であれば『サイエンス人口能力者』の強者に匹敵するほど。

ここにいる灯裂 蒼も『天変能力者』の1人である。

1

金髪のオールバックは立ち尽くしている蒼と脅えている少女の目の前に姿を見せた。

「さあ、ブレイン。我々の元へと帰りましょう」

「……私はもう、あそこには帰らない」
「いや、ですねえ。アナタの意思は聞いていないのです。これは上の命令だ。反論するなら殴つても 血をはかしても 腕が半分もげようとも連れて帰りますよ」

金髪はそう言うと、少女へと一步、一步と歩いていく。
少女は腰を抜かしながらも必死に後ずさりをしている。
そこへ蒼が立ち上がる。

少女の前に立つと金髪へ指を立てて叫ぶように言う。

「誰だか知らねえけど、女の子を脅かすような奴にいい奴はいねえよな？」

「ふ……。アナタこそ見ず知らずの関係に口を挟むほど暇なようですな」

「いや。俺とこの子は見ず知らずじゃねえ。今ここで会った。それだけで十分だ」

「くふふ……。いや、君は面白い事を言う しかし」

カツと金髪は蒼をにらんだ。

その瞬間、一瞬だ。

蒼が少し後ずさりをした。

(こ、こいつ……普通の人間じゃねえ……………)

「てめえ…………『学園街』の人間じゃねえな」

「くふふ……。こんなちっぽけな街にいるはずはない。私達、『神に近し者』は世界を相手に神に従い罰を起こしている」

微かだが金髪から殺気が消えた。

蒼は腕を組むと、ある1つの結論にたどり着いた。

「お前の言っていることはよくわかった。きっとこの子の力がその『神に近し者』には

絶対に必要だったことも……」

「そうですか。わかっていただけなのなら、恐縮です。ではその子を

「しかし、それで俺がこの子を引き渡すとは言っていない」

「!?!」

「俺は1人の人間だ。恐れを成して逃げ出したい時もある。でも、たった1人の女の子を

護れない程度じゃ、男じゃねえ。だから、俺はお前に敵対する」

「止めて!! アナタが死んじゃう!!」

「大丈夫だ。それより、この袋を大事に持って、どこかに隠れてる」

蒼はコップの入った袋を少女に渡すと、少女を押し出して遠くへと逃がす。

金髪は『くふふ』と不愉快な笑みを浮かべると右手を握り始めた。

「これで俺とお前、一騎打ちってことだぜ」

「アナタは死ぬかもしれないですが、いいのですか?」

「俺は死なない。絶対にな!!」

「いいでしょう。その度胸に免じて最後に私の名を言わせていただきますしよう。」

私の名前は、ヴィンタ^{クハント}ハント。力は『神の手』^{クハント}

金髪　　ヴィンタがそう言った瞬間、右手が大いなる光に包まれて蒼を覆い潰した。

大いなる光の下からはコンクリートが割れた後と衝撃の煙が立ち昇っている。

「よく避けましたね」

ヴィンタが右手を上げると、元の大きさへ収縮していく。蒼は間一髪の所で飛出し、地面へ転がっていた。

「あぶねー。マジで殺す気だよこの人」

「ええ、私共に逆らう者はいつの世界でも死んできました故」

「あーあ。俺つてもしかしてとんでもねえ奴らに首つつこんだみたいだな」

「そうですね。でも、誤った所で許すほど私達も甘くはありませんので」

大いなる光を纏った右手は容赦なく蒼を叩き潰そうと地面を砕いていく。

蒼は毎回、スレスレの所でそれをかわして行った。

「アナタ……能力者ではないのですか？」

「一応、能力者だ。けど……めんどくせえから使わねえ」

「それでは死んでしまいますが……よろしいのでしょうか？」

ヴィンタは大いなる光で最大限まで大きくしたと思われる右手で周囲の建物ごと蒼を潰しにかかった。

これで、終わりです……ヴィンタはそう呟いたが、右手は一向に地面を壊さない。

いや、地面まで手が届いていない。と、言った方が正しいのであるう。

「言い忘れてた……俺の名前 俺は灯裂 蒼。能力は」

大なる光に包まれた右手は一瞬にして蒼い焰へと変貌した。
ヴィンタはとつさに手を戻すと、中からは蒼い焰で巻き上がった煙
と蒼の姿が……。

「
『フレアリン 霖焰蒼生』」

蒼はそう叫ぶと足に焰を纏い、ヴィンタに向かって飛んでいく。

「くはは……。面白い、灯裂 蒼。その名前覚えておこう!」

2

蒼がヴィンタに殴りかかった時にはその姿はここにはなかった。
辺りを見渡すが、声も姿も何もかもが見えていない。

蒼はしばらく警戒していたが、後ろから少女の声で我に返る。

「君……大丈夫だった?」

「ああ、あのヴィンタって奴はどこかに消えちまったけどな」

「凄い……アイツは『神に近し者』の4大幹部の1人なのに……」

少女は真顔でそう言った。

蒼は少し照れながら頭を掻く。

「 そうだ。この袋! 」

「 おお。ありがとな 」

蒼は少女からコップの入った袋を受け取った。
すると少女は後ろを向いて、去ろうとする。

「 これで……お別れだね 」

「 いや、お別れなんかじゃねえよ 」

「 でも、私は狙われてるの。このまま、ここにいたら君にも迷惑が 」

「 そんなのはどうでもいい! 」

蒼が珍しく大きな声で叫んだ。

少女は肩を小さくしてカクツと膝をついた。

「 お前は俺が護る。それでいいだろう? まあ、それ以前に俺も狙われるようになったみたいだしな 」

蒼は苦笑を浮かべた。

少女は目を点にすると、口から笑みがこぼれた。

「 いいのかな……こんな私が普通の生活できるなんて…… 」

「 悪いわけねえだろ? 俺はお前を歓迎する 家へ来いっ! 」

蒼はそう言つと袋片手に家へと向かう。

袋を持った手の反対側には少女の冷たく小さな掌が握られていた。

屋根の上にヴィンタは座っていた。

せっかく新調してあった黒色のスーツは少年の焰により少し焼き焦げている。

ヴィンタは焦げた面をパタパタと叩くと、再びきなおした。

「ヴィンタ、君が一撃を喰らうとはそんなにそいつは強いのか？」

「いえ、私が思ったのは強さではなく……度胸。彼はどんな苦難バにも反することなく絶対の可能性を信じている。言わば、『可バ能性』を持つ男」

ヴィンタの後ろにいる女性はその言葉を聞くと、ため息を付いた。

「強くないのか……なら、私が殺しちゃうけどいいのかよ？」

「別に、私は求めてなどませんよ。しかし、アナタでも勝てるかどうか……」

「ふっ、甘く見られたものだ。『神の足』ユッケフットを持ったアタシに蹴れない物なんてねえよ」

「そうですね」

ヴィンタは短く会話を切り上げると、立ち上がってどこかへと姿を消した。

残された女性は不敵に笑みを浮かべると

「灯裂 蒼……。こいつは殺しがいがあるそうだ」

第3話 事情説明（前書き）

第3話！！

アクセス数とお気に入りが増えることを祈って今日も投稿。

第3話 事情説明

1

神に近し者に遭遇してから翌日。

蒼は眠い目を擦りながら、自室のベッドから這い上がった。

理由は簡単。

上に昨日助けた少女が気持ちよさそうに寝ているからである。

もちろん、重くはない。

むしろ軽いといった方がいい。

しかし、あれだ。

昨日今日助けた人にここまで心を許せるとはまだまだこの子も子どもなんだと思う。

21

「それにしても、今日は眠いなあ・・・」

蒼は欠伸をすると、再び布団をかぶって眠りに着いた。

少女には毛布をしっかりと敷いて・・・。

2

次に目覚めたのはそれから3時間くらいした後だった。

自分の腹部が異様に動くので目を開けると少女が目を擦っていた。

蒼は少女に挨拶を交わす。

少女も寝ぼけながら、挨拶をした。

閑話休題。

2人は今、居間のソファーに座っている。

そう、話を聞くためだ。

昨日の『あれ』について。

「そろそろ、詳しい状況を説明してくれないか？」

「うん、わかった」

少女は短く言葉を切ると話始めた。

「私は『神に近し者』に所属していた。でも、神なんて想像上の人物に願う事をアホらしいと考えた私は抜け出してきたの。本部のあのイタリアから」

「イタリア!？」

「うん、イタリア」

「凄いなイタリア……いいな行ってみたい」

「『神に近し者』には会員?のようなものが付けられているの。1桁の?の者達は神から力を与えて貰える……」

蒼は少女の声を聞き、ゆっくりと口を開く。

「……じゃあ、君も1桁の?なの?」

「私は? 9 通称 『神の脳』ゴッドブレイン」

「『神の脳』……だから、あのヴィンダって奴は君をブレインって呼んだんだ」

「そう。アイツは? 2 『神の手』ゴッドハンド」

蒼は思い返していた、昨日の事を。
あのヴィンタの能力を。ちから

「でも、あんなの科学じゃ解明できないほど、可笑しい物だったぞ」
「『神の罰』……」ゴッドペナルティ

少女がそう呟くと、蒼は口を濁して話を聞く。

「私達は神に反する者達を消す役割をしてきた。その為に受けた力
なの。だから、今の私にとっては『罰』」
「だったら、無くせばいいんじゃないの？」
「それは無理。私達は過去に1度死んでいるから……その時に宿っ
た力なの。だから……」

少女は口を閉じた。

蒼はゆっくりと少女の頭に手をのせると髪をくしゃくしゃとした。

「な……なな……」
「悪かったな。難しい事言わせちゃって　でも、大体わかる。
ようは全員、倒せばいいんだろ？」
「……で、でも全員倒したとしても私のこの力は消えない」
「いいじゃねえか。お前は『神の脳』を持ってんだぜ？　もっと誇
りに思えよ」

蒼は微笑んだ。

少女は頬を赤く染めるとこれまでになかった『笑顔』を見せた。

「詳しい話は無しだ。俺はバカだからよくわかんねえしな」
「そう……。それでいいなら」

少女は笑うと、そう言った。

蒼は立ち上がると少女の前に立って

「これからよろしくな。俺は灯裂とうめき 蒼そう」

「私は……………」

黙り込む少女。

それもそのはず。

経った今まで『ブレイン』と呼ばれていた彼女に本当の名前なんてない。

それを察せなかった蒼は下唇を噛む。

そして、考えた末に

「ゆう 灯裂 ユウだ。お前は今日から!!」

「ゆう…………ゆう、ゆう、ゆう。ゆう!!!!」

少女改め、ユウはどうやら気に入ったようだ。

家中をぴよんぴよんと飛び回る。

蒼は微笑みながらその姿を見ていた。

ぴよん。ぽん。

家の中に響わたる音。

チャイム。

蒼は無意識に玄関へと向かう。

ドアを開けた瞬間、ゆうが叫んだ。

「開けちゃダメっ！……！」

蒼はその言葉に気づいたがその時にはもう遅かった。
ドアは蹴り落とされ蒼はドアの下敷きとなっていた。

「あーあ。壊しちまいやがったよ……あ、アタシか」

不抜けた声でそう呟いた彼女。

赤い髪を後ろで纏め、大きな胸をサラシで覆い、上から長いパーカーを羽織ってご丁寧にフードまでかぶっている。

「……フット」

ユウはそう呟くとフットはにこやかに笑って

「灯裂 蒼。悪イけど死んでくれない」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4599z/>

アビリティー・オブ・ウォーズ

2011年12月18日00時48分発行